帰一協会の理念とその行方 —— 昭和初期の活動[1]

高橋　原

はじめに

帰一協会とは何か。『国史大辞典』（吉川弘文館）の項目を調べてみると，「明治四五年，日本女子大学創立者の成瀬仁蔵が中心となり，姉崎正治・浮田和民・渋沢栄一・森村市左衛門らの学者，実業家によって結成された。その標語に「階級，国民，人種，宗教の帰一」とあり，「まず国内の精神的統一をはかり，次第に外国の同志をも合同しようと企画し，研究会・出版・公開講演会などの事業を行った。当初の会員百名は一流の実業家，学者，宗教家」（執筆・高橋昌郎）と説明されている。また，最新の『岩波キリスト教辞典』では，「明治末期から昭和初期の国際的学術文化交流団体。…宗教・道徳の研究と諸宗教の相互理解・協力の推進を目的に…設立。…42 年解散」（執筆・影山礼子）と要を得た定義がされている。これらの記述は結成時の事情，理念を基準としたものである。しかし，その中心となった成瀬が 1919（大正 8）年に没してから，1942 年 12 月 20 日の解散[2] まで帰一協会が存続しているという単純な事実からしても，帰一協会の全体像を評価するには，大正中期以降，昭和期までの活動を視野に入れる必要があるのは言うまでもない。おおむね成瀬仁蔵の没年 1919 年までの帰一協会の初期の活動については，中嶌邦「帰一協会小考（1）・（2）」[3] に詳しいので，本稿では，結成当初の各自各様の帰一の理念について検討するとともに，従来，資料の乏しさなどから，忘却されたままであった関東大震災から昭和初期の帰一協会の活動を紹介し，再考を試みたい[4]。

1.　帰一協会創立者達の思惑

宗教協力の背景

帰一協会の結成は，直前の 1912 年 2 月 25 日の三教会同と同じ文脈の中でとらえられることが多い。1910 年の大逆事件や社会主義思想の勃興という世相を背景に，支配者層は国民統制の一手段として，あるいは後述の渋沢栄一のように新時代の指導理念として，宗教に期待をかけていた。その中で，内務次官の床次竹二郎が主導して仏教，キリスト教，神道の代表者を集めたのが三教会同である。これは文字通りの「会同」で，華族会館に集まった代表者を前に内務大臣原敬が挨拶を述べたに過ぎなかったが，諸宗教が国家のために協力するという気運の表現であったことは確かであり[5]，キリスト教が仏教，神道と同列に扱われた意義も大きかったと言えよう。

成瀬仁蔵

三教会同をまたず，すでに 1911 年には帰一協会結成の萌芽があった[6]。その原動力となったのは，1901 年に日本女子大学を創立し校長となっていた成瀬仁蔵であった[7]。成瀬は沢山保羅により受洗し，牧師としての経歴を有するが，1892–93 年の渡米，留学後はむしろ，ユニテリアン的な思想を身に付けていた[8]。成瀬の姿勢は次のような発言に特徴的に現れている。「私は今

後の宗教，今後の信仰といふものは，独断的なクリスト教のみではできない。同様に他の宗派のみでもできないと考えたのである[9]。」「私は嘗て種々の宗教を信じた。神道も，仏教も，基督教も皆信じた。霊智学も，倫理運動も…。吾々はこの総てを信ずるのである，説くのである[10]。」

この成瀬が，日本女子大学設立資金調達をめぐってもともと縁あった渋沢栄一，森村市左衛門に諮って[11]，1911 年頃から「現代思潮界改善」ないし「宗教統一」[12]のための会合の準備を始めたのが帰一協会の起源のようである。その後，1912 年 4 月 11 日に渋沢邸で帰一協会準備会が行なわれ，同年 6 月 20 日，成瀬のほか，渋沢，森村，姉崎，浮田が幹事となって帰一協会が正式に発足した。すでに成瀬はライフワークと言える日本女子大学創立によって，自らの理念を実現し，実践していたと思われるが，彼がさらに帰一協会に向かった意図は如何なるものであったのだろうか。成瀬は帰一協会結成後の 6 月 23 日に語っている。「私共が予て切望して居りましたところの，精神界の統一点が出来た。今後わが社会を導くところの，社会的人格が生れた。その名は『帰一協会』と名づけられたのである。私が少年から奮闘して来た，命をかけて望んで来た，その望みが達せられるであらう…[13]。」そしてこのすぐ後で，「私が廿年前，米国のアンドヴァー［神学校］で一年餘も苦んで，漸くその生命を見出すことのできた，女子教育の根本たる宗教…」という言い回しが出てくる。つまり，成瀬が根底に持っていた宗教的ヴィジョンを米国の宗教思潮と触れる中で深化させ[14]，実を結んだものの一つが日本女子大学であり，また一つが帰一協会なのであった。成瀬は次のようにも述べる。「…精神界の帰一点，即ち宇宙の実在（レアリチー）というようなもの，…唯々吾々はその生命に導かれている，そうしてそこに入るのである。自分を捧げたのである。これが吾々の道徳であり，宗教である[15]。」しかし，「成瀬宗」を開こうとしているのではないかという誤解は否定しつつ，「昔は仏教，儒教，基督教などと分れて立っていたけれども，今日はそんな地方宗などを建てる時でない。…今日は総てが帰一するところのもの…総てを融和する，社会的人格の生れ出づべき時なのである[16]」としている。キリスト教を「地方宗」と言い切るあたりが，「ユニテリアン的」と評される所以であろう。岸本能武太をはじめ，ユニテリアン系の人材が帰一協会に集まったことも事実であったが，姉崎正治は渡米中に成瀬仁蔵に宛てた書簡で，帰一協会がユニテリアンと一線を画すべきだという趣旨を述べているようである[17]。

対外志向が顕著であることも成瀬の姿勢の特徴である。帰一協会は「研究問題要目案」として「信仰問題」「風教問題」「社会・経済・政治問題」とともに，「国際並に人道問題」を掲げてはいるが[18]，成瀬の行動は突出した印象である。成瀬は帰一協会発足後間もない 1912 年 8 月に欧米への教育視察に出かけた際に，多くの著名人に面会して帰一協会の趣旨を説明し，意見の記帳，署名を求めた。会報第 2 号所収の「欧米旅行報告」には，クリスマスの朝に突然訪問し，食事の誘いも断わり三分だけ話をして飛んで帰ったなどというエピソードがあり，また，『成瀬先生伝』などに示唆されている成瀬の英語の覚束なさからすると[19]，どの程度正確な趣旨説明がなされたのかは心もとないのだが，ともあれ，概ね好意的なコメントあるいは署名を寄せた人物は実に 177 人にのぼった[20]。このかいあってか，1912 年 11 月 30 日に米国帰一協会が成立し，ヨーロッパでも同様の組織の下地が出来上がった。その後，1913 年に姉崎がハーバード大学客員教授として渡米したこともあり，米国帰一協会との交流は順調に見えたが，まもなく解散してしまったという[21]。

さらに成瀬は，やはり帰一協会の発起人であった銀行家森村市左衛門が，「遠大の原理を論じ合

て居るばかりでは甚だまどろかしく」思うというのに同調し，「一種の社交倶楽部にとどまり，… 到底有効なる活動は之によりて期待せらる可くも無[22] 」と不満を抱いていた浮田和民らとともに「自助団」を創立する計画を立てた。これは阪谷芳郎によればフリーメーソンの日本版（姉崎の表現では帰一協会の実行的別動隊）であるが，帰一協会よりも国民に広く，直接に働きかける啓蒙活動が考えられたようである。しかし，意思統一に手間取っている間に成瀬が病没し，資金の用意までされていたこの計画は，何も決まらないまま立ち消えになった[23] 。

このように，成瀬の帰一協会へのコミットメントは，キリスト教を経由した独自の宗教的ヴィジョンに基づき，国際性を志向し，上記の引用中の「社会的人格」（＝帰一協会）という言葉に現れる実践性への要求によって特徴付けられるものであった。

渋沢栄一

次に，渋沢栄一について検討する。帰一協会を運営するための会費は，一般会員が年間 6 円であったのに対して，渋沢は年間千円を寄付しており，帰一協会のパトロン的存在だった（その他の会計については後述）。実業家としての渋沢栄一の功績は周知の通りだが，その人生の結論は「論語と算盤は調和する」ということであった。渋沢は「自分一個としては論語を基本として，儒教に安心を求めて世に処すれば十分」であるとして，「孔子教即ち仁義道徳を分に応じて踏み占めてゆくこと」を安心立命とするという。しかし彼は，あるドイツ人学者に対して，明治維新が無難に成功した原因として，国家の中心たる皇室の存在と，儒教道徳による国民統一を挙げたものの，神道，儒教，仏教の衰退とともにキリスト教の感化力を認めざるを得ず，将来も統一が動揺しないか不安を覚えるようになったという。その結果希求するようになったのが，「儒教，仏教，耶蘇教等あらゆる宗教の長所を折衷綜合したる，統一的の一大宗教」である[24] 。

渋沢はこのように，当代一の実業家らしく，国民の統一をもたらし，率いていくための実践的な倫理を必要としていたと言える。帰一協会の書記を務めていた今岡信一良は，ある会合で渋沢が「アメリカでは宗派や教団の対立で色々お困りのようであるが，日本では帰一協会を創立して，諸宗教の統一体たる新宗教即ち帰一教を奉じて居る云々」という趣旨の挨拶をしたと記憶している。もっとも，姉崎によれば，それは全くの誤解であり，協会が諸宗教の統合や新宗教創設を目指すものでは絶対にないのであった[25] 。

同じく実業家であり，渋沢とともに財政面で協会を支えた森村市左衛門は，もともと「仏教にしようか基督に頼ろうか 」と迷っており，「何とかして宗教を合一したい。… 汽車に乗るにも行先のはっきりした切符が無いと心細い，自分は早くその切符を手に入れたい 」と語ったと言われる[26] 。ここにも，具体的な人生の指針を提供してくれる新しい宗教創成への期待感が現れている。

井上哲次郎

井上哲次郎は，帰一協会準備第一回にすでに参加しており，発足時には評議員に名を連ねた。言うまでもなく井上は帝大の哲学科教授として学界の権威であり，また，姉崎の岳父であるという関係にあった[27] 。また，井上は南朝論の代表者として，1911 年から始まっていた南北朝正閏論争の中にいた。宗教との関係で言えば，井上は明治 20 年代後半には所謂教育と宗教の衝突論争においてキリスト教排撃論の中心にいた人物であり，また，彼の「理想教」を掲げる倫理的宗

教論[28] は，キリスト教のみならず，迷信的要素を含む個々の成立宗教には否定的であった[29] 。こうした井上とは当然ながら対立する立場にあるキリスト教系の人物も数多く参加しているという事実は，帰一協会の性格を物語るものである[30] 。もっとも，井上は単に宗教を否定した日本主義者ではなかった。井上は，儒仏キ神の各宗教を手厳しく批判するが，一方でそれぞれの長所にも言及し，「各宗教の根底に於ける契合点」を見出すことを提唱している[31] 。井上の展望は「今日我国に於ける諸種の宗教を統合一致し，以て完全円満のものを作らんとせば，宗教の根本性質，而して契合点なる，且つ生命の存在する所なる，実在を倫理化せる主義を取らずんばあるべからず[32] 」というものである。「倫理以上に何等の宗教もあるべきものではありません[33] 」と断言する井上が帰一協会に期待したものは，したがって，諸宗教の「協力」ではなく，諸宗教の寺院，儀式，教義等の外形的なものを超えた倫理ないし道徳における「一致」であった[34] 。なお，帰一協会の会員名簿には，1924 年の時点では評議員として井上の名前が確認できるが，1931 年には名前が見えない。井上の目的がこのような倫理的宗教を目指す「一致」の模索であってみれば，後述のような，宗教の問題から遠ざかっていく帰一協会と縁が切れていくことにも合点がいくのである。もっとも，大正 15 年に，井上が前年に発表した『我が国体と国民道徳』の三種の神器の解釈が問題化し，井上は貴族院議員をはじめとする一切の公職を退いた。この筆禍事件を契機に帰一協会の会員も辞したという事情も考えられる[35] 。

姉崎正治

帰一協会結成の中心人物のひとり，姉崎正治は結成当時，すでに嘲風という号による文名も高く，東京帝国大学教授として宗教学講座を担当していた。さかのぼって 1896 年の宗教家懇談会には『太陽』の宗教欄記者として参加し，同年に岸本能武太らと比較宗教学会，翌年には岸本，横井時雄，大西祝らと丁酉懇話会（後に丁酉倫理会）を結成して活動していた[36] 。姉崎は三教会同に際しても床次に協力して教団間の斡旋を行なったと言われており[37] ，帰一協会のような協調的宗教・倫理運動に招かれるのは自然の成り行きであった。

姉崎のスタンスはどのようなものであったか。姉崎は，晩年の自伝『わが生涯』において，「宗教という広い意味でのいのち」には，「排他的方面」と「包括的方面」が働いていると述べている（109–110 頁）。姉崎自身に関して言えば，日蓮主義信仰が前者に当たり，宗教家懇談会や丁酉倫理会，そして帰一協会は後者の現れであったという。「例えば帰一協会の起ったはじめにも，渋沢子爵が…諸々の宗教に共通の点があるのを拾いあげて，いわば一つの別の宗教を作ろうという傾向であったが，自分の考は少し違い，諸々の宗教を各々その方向で機能をつくすのを，広い意味での人生の為という自覚を持って共同するという点にあった。…排他的信仰を重んじつつ，しかもその信仰が共々人生をつくり上げる上での役目を果たせばいいと考えた」（110–111 頁）。また別の箇所では，諸宗教と帰一協会の関係を，銀行と精算所の関係にたとえて，各銀行（宗教）は各々その特色を発揮しつつ業務を行い，精算所において相互を理解し，無益の争いを避け，同じ目的に向かっては一つになるとしても，違った目的に関してはお互いの独立を保っていくと表現している（116 頁）。こうした方向性の宣言ないし弁明は協会の外に対しても行なっており，『六合雑誌』にも，帰一協会が既成宗教の合同を企図したものでも，新宗教創造の試みでもないとして，「揣摩憶測」の批判を牽制している[38] 。

こうした姉崎の立場は経歴の初期から一貫している。 たとえば，姉崎が三教会同の前身として

位置づける宗教家懇談会の意義は，「折衷混和にあらずして，中心精神の融化」に求められている[39]。姉崎は，一九〇四年の『復活の曙光』以来，個人精神の由来する根底としての神，宇宙精神との交流をという境地を称揚し続けてきたが，だからといって，究極の一者によって多を棄てることはせず，終始一貫して「包括的方面」を重視し，いわば多元主義的態度を維持している[40]。

姉崎は当初から帰一協会の，いわば理論的な中心となった。それは，たとえば帰一協会の「趣旨」（会報第1号）の文言にも現れている。「明治維新の始め，開国進取の方針定まりて以来，我が国運は，諸種の方面に於て，駸々として隆昌の実を擧ぐると雖も…」と始まるこの文章は，慣用的な定型句を多用しているとはいえ，15年前の丁酉懇話会の趣意書と比較してみると，用語・内容ともに重なる部分が多い。また例えば，第一次世界大戦の際に帰一協会が出した「国民の覚悟に関する宣言」[41]も，姉崎起草によるものである。こうした公式文書の文案起草や，会報の編集を通して[42]，姉崎が自らの思想傾向を帰一協会に徐々に浸透させていったと考えられる。

2. 初期の活動状況

姉崎の回顧によると，帰一協会が「会として一番成熟して」いたのは，大正三（1914）年前後である[43]。実際，1916年の第8号までは会報も順調に毎年二回発行されており，また，1915年には特別委員会として時局問題研究委員会が発足し回を重ねた[44]。この委員会の討議の結果が，翌1916年2月に公開講演会開催という形で発表され，帰一協会がはじめて世間に向けて直接メッセージを送ることになった[45]。また，学校教育から宗教が排除されていた状況に疑問を投げ掛ける建議を文部大臣に対して行なったことがあり，やがてそれが「宗派教育はいれないが，宗教情操の教育はいい」という文部次官通達として結実するという実効をあげた[46]。これは，姉崎によれば，帰一協会がもっとも効果をあげたことの一つだが，1914年には，教育と宗教をテーマとする例会が重ねられていた[47]。

しかし一方で，前述のように，発起人に名を連ねていた浮田和民が，同じ1914年の時点で帰一協会の活動状況を批判しており，必ずしも活動は順調なばかりではなかったことがわかる。この時期はまた，姉崎自身のハーバード大学客員教授としての渡米（1913年秋から二年間）と重なっている。ともあれ，大正期を通じて例会は継続し，『会報』の発行は不定期になってしまったものの[48]，かわって帰一協会叢書というシリーズが1916年から1925年まで計十冊刊行され[49]，第一次世界大戦を受けて『時局論叢』全三冊[50]も発行されている。

この時期の「時局問題」への関心の移行は，1915年1月20日例会の時点で「前年来の研究問題たりし信念問題は大体の帰結を見たるを以て，一先づ其の研究を中止し」と，宣言された通りであり，大正中期以降は，「信念問題」すなわち，当初から続けられてきた宗教や道徳というテーマがやや後退すると言ってよい。

この後，1917年から1919年に至る時期に例会は継続していたが[51]，管見の範囲では，講演の内容は不明である。1919年に成瀬仁蔵が没し，講演の内容は，別表のとおり国内外の政治情勢に関するものが多くなる[52]。

3. 震災から昭和期へ

1923 年 9 月に関東大震災があり，翌 1924 年には早くも，会場を灰燼に帰した如水会館から東大構内の山上御殿跡教員会議所に移して月例会が再開されている。一月の講演は姉崎による「震災後の精神状態に関する報告並協議」であった。この年，姉崎の講演が三回あった他，講演者に弟子の矢吹慶輝，今岡信一良といった「身内」が多いことは，震災後の混乱期に例会の手配が十分にできなかったことを反映するものであろう。実際，姉崎は生涯の中でも最も多忙な時期を迎えていた。その第一の原因は，震災で全焼した東大図書館を復興するべく図書館長に就任したことである。ロックフェラー財団から 400 万円の寄付を取り付け，また自ら設計に口を出すなどして，図書館運営は姉崎のライフワーク的なものとなった(53)。姉崎の多忙ぶりの証左として，震災以降，1928 年の新図書館落成までに姉崎に新しくついた肩書きのみを列挙すると，帝都復興院評議会臨時評議員，帝国学士院会員，日本図書館協会評議員（以上 1923 年），外務省諮問委員，東京帝国大学評議員，日仏会館創立委員・評議員・常務理事（以上 1924 年）。正則中学校理事，学士院連合会議嘱託調査委員，太平洋問題研究会執行委員（以上 1925 年）。学士院幹事，国際連盟協会内学芸協力国内委員会第二部文学美術担当委員，文部省宗教制度調査委員会委員，日本図書館協会理事（以上 1926 年），野口英世追悼紀念会発起人（1928 年）のごときである。もちろんこの他に大学での講義をこなし，さらに炎暑の仮図書館で『切支丹宗門の追害と潜伏』を仕上げ，所謂切支丹五部作の刊行が始まる。1929 年 1 月 24 日，姉崎が協会の運営について相談するために渋沢を訪れた際の記録(54) には，「姉崎博士雑務多忙の為め乍思会務に尽力する事怠り勝ちなるため」という理由から，矢吹慶輝（当時東大宗教学科講師）を「専ら思想方面の事」に従事させることにしたとある。また「姉崎博士多忙の為め従来の講演筆記等の刊行せざりし」という記述もあり，この時期の活動の停滞が垣間見える。渋沢は，昭和 3 年の談話で「今では宗教団体でもなく，学問的研究の会でもなく，単に一種の相談会として存在している始末で，私も滅多に顔を出さない(55)」と述べている。なお，1929 年 1 月時点での会員数は 119 名であり，毎回の例会の出席者は 20 名前後であった(56)。

震災以降，帰一協会の活動状況を知る手がかりは少なくなる。しかし多忙な姉崎を助けて，協会の実務運営を行なったのは宗教学研究室の副手（助手）達であったことが，東京大学宗教学研究室所蔵の『研究室日誌』に見て取れる(57)。これによると，帰一協会の事務は，会計，入会者，退会者の事務処理から，例会講演の依頼と日程調整，会場の手配，案内状等印刷物の発送にいたるまで，彼らによって行われていた。最初期の今岡信一良から，植木謙英，原田敏明，鷹谷俊之，岸本英夫等を経て，解散時の竹園賢了までが，おそらく帰一協会書記としてこの任に当たっていたと思われる。また，同研究室所蔵の『帰一協会事務日誌』『帰一協会出納簿』によると，事務経費はすべて渋沢事務所から出ており，毎月 80 円，90 円といった額が支給されていた(58)。毎月の書記手当ては一人 20 円(59)，例会会場の日本倶楽部の借室料が 10 円，例会講演者への謝礼が 20 円ないし 15 円といった具合である。

震災後，昭和初期までの例会の内容を別表に示す。1924 年は治安維持法成立の年，1928 年は二度の共産党弾圧があった年である。対外的にはこの 1928 年には山東出兵と張作霖爆殺事件があり，1931 年の満州事変に至る。こうした世相を反映して，帰一協会は初期の，三教会同に続く宗教協力の流れに位置づけられる活動とは異なる様相を呈している。例会の講演者には宗教界以

外の人選が多く，斎藤七五郎（海軍中将），水野錬太郎（内務官僚，田中義一内閣の文相），早川三郎（内務事務官），纐纈彌三（総監官房特別高等課長），井染禄郎（陸軍少将），酒田秀一（外交官），今村力三郎（弁護士），平田勲（東京地裁検事）などが目立つ。各講演の内容はほとんど不明であるが，渋沢史料館所蔵『帰一協会書類』に綴じ込まれている謄写版書類に概要が記されているものもある。例えば，平田勲の講演は日本共産党の検挙事件を年次順に整理した後，三・一五事件検挙者 471 人の年齢，学力，品行（花柳病罹患率），健康，家庭事情，学歴の内訳，共産党に加入した諸原因などを紹介するものである。それに続く，河合栄次郎，矢吹慶輝，宇野円空の講演はいずれも，マルクス主義あるいは反宗教運動の思想内容を紹介した上で批判するというもので，この時期の例会がマルクス主義についての共通理解を得ることを目指していたことがうかがえる。佐木秋夫は，この時期はさかんに宗教学者とマルクス主義者の間に論戦があった時期であると指摘している(60)。1931 年 1 月例会の記録には宇野円空，椎尾弁匡など六名が新入会し，会員数が 120 名となったと記されており，結成当初の会員が次々と世を去る中，会員数の点だけからすれば活動に衰えは見えない。

結成当初のような宗教間の相互理解・協調といった方向性は退いているようだが，まさにそのような目的で開かれたのが，1928 年 6 月の日本宗教懇話会主催による御大典記念日本宗教大会であった。中心となったのは今岡信一良であり，各部会の代表は平和部（新渡戸稲造）・教育部（井深梶之助）・社会部（矢吹慶輝）・思想部（姉崎正治）という面々で，井深を除いて帰一協会会員が占めている。それでありながら主催が帰一協会でないということは，やはり「分家」が沢山できて帰一協会の相対的な重要度が下がったという姉崎の発言を裏付けるものであろう(61)。日本宗教大会は上述の政治情勢の中，建国会の赤尾敏らが暴れまわり(62)，反共産主義の決議がなされるなど波乱含みで，平和協調裡に進んだとはとても言い難いものであった(63)。帰一協会結成から 16 年を経て，もはや楽観的な「帰一」論が唱えられる雰囲気ではなくなっていたことが分かる。

資料　帰一協会例会記録——関東大震災以後

（使用資料は注 (4) を参照。これ以前の記録は中嶌 (1988)、『渋沢栄一伝記資料』第 46 巻を参照。）

1924（大正 13）年
- 1.28　姉崎正治「震災後の精神状態に関する報告並協議」
- 2.21　コールター講演
- 3.　矢吹慶輝「社会思想と新道徳の発生」
- 4.25　今岡信一良「公共教団の主義と事業」
- 5.30　島本愛之助「道徳律の社会的改造の実際的方法への転回」
- 6.30　田中晴川「孔・老・釈　三教の一致」
- 9.29　増田義一「政治の革新に対する精神的基礎」
- 10.28　姉崎正治「「人生の構造」に就て」
- 11.　姉崎正治講演
- 12.18　浜名寛裕「鮮人の帝国に対する心理的離背」

1925（大正 14）年
- 1.19　新渡戸稲造（談話）
- 2.19　ハリー・ワード「社会改造における宗教の位置」
- 3.24　井上雅二「海外移民と我邦の立場」
- 4.18　姉崎正治「太平洋問題会議と宗教及文化の接触」
- 5.29　穂積重遠「親族法の改正について」
- 6.　齋藤七五郎「第 2 軍縮会議について」
- 9.　高柳賢三「国民外交と太平洋会議」
- 10.27　山口宏沢「天理教について」
- 11.27　沢柳政太郎「職業の道徳に就いて」
- 12.17　ウィリアム・アキスリング「帰一主義と国際問題」

1926（大正 15・昭和元）年
- 1.29　矢吹慶輝「三階教と現代思想」
- 2.19　及川智雄「世界宗教大会の計画に就て」
- 3.19　矢吹慶輝「東京市ノ社会事業」
- 4.29　嶋原逸三「世界宗教大会開催の主旨に

就て」
5.21 井上雅二「移民問題と日本の国情」
6.29 諸井六郎「欧米視察談」
9.29 例会中止（ケンネス・サンダース予定）
10. 6 ケンネス・サンダース「タゴールとガンヂ」
12.17 おそらく大正天皇死去のため中止
1927（昭和 2）年
1.29 穂積重遠「相続法の改正について」
2.21 石橋智信「日本の一民間信仰「一尊教」に就て」
3.25 水野錬太郎氏「宗教法案について」
4.19 下村　宏「新聞と社会生活」
5.27 松井茂「防火事業の精神と国民精神」
6.17 D・スカッダー「人類同胞の福音」
9.23 水野錬太郎「教育の改善について」
10.26 頭本元貞「東洋に於ける宣教師の功罪批判」
11.28 麻生正蔵「我国教育の重要問題」
1928（昭和 3）年
1.24 渋沢栄一「帰一協会ノ目的ニ就テノ所感」
2.24 今岡信一良「日本宗教大会開催の趣旨」
3.23 田村直臣「宗教教育の原理」
4.25 関　寛之「児童の宗教教育について」
5.25 姉崎正治「マルクス主義学生の発生と現代教育の欠陥」
6.29 内ケ崎作三郎「治安維持法改正について」
9.27 頭本元貞「渡米雑感」
10.29 本多日生「仏教より見たる思想問題」
11. 早川三郎「共産党事件の顛末」
12.18 纐纈彌三「日本共産党事件ニ就テ」
1929（昭和 4）年
1. 井染禄郎「ソヴィエット露西亜の東洋に於ける革命指導の実情」
2.22 友枝高彦「世界宗教会議と国際文化交換とについて」
3.22 大内兵衛「経済学における現時の傾向」
4.19 加藤咄堂「所謂教化運動の種々相」
5.17 大倉邦彦「教化運動についての余の体験」
6. 3 タゴール歓迎茶話会
7. 8 加藤精神「思想問題に関する私見」
10.18 山内繁雄「遺伝学上より見たる産児制限の批判」
11. 4 原田　助「米国魂とは何ぞや」
12.20 牧野英一「行刑の改良とその思想的意義」
1930（昭和 5）年
1.17 矢吹慶輝「新日本の思想問題 (1)」
2.21 矢吹慶輝「新日本の思想問題 (2)」
3.28 二木保幾「仏教とマルキシズム」
4.25 木村龍寛「聖雄ガンヂーの運動並びにそれを中心としたインド現今の思想」
5.30 林博太郎「最近欧米の教育思潮」
6.27 酒田秀一「ソヴエットロシヤの社会事情」
9.29 宇野円空「植民地の宗教事情」
10.24 下村　宏「我国における現代政治経済事情」
11.13 伝道問題調査懇談会 (1)
11.27 伝道問題調査懇談会 (2)
1931（昭和 6）年
1.22 姉崎正治「現代的と宗教的」
2.27 今村力三郎「思想に基く犯罪（主として京都学生事件の話）」
3.19 河合栄次郎「学生思想問題について」
4.24 平田　勲「日本共産党の誤謬」
5.29 河合栄次郎「マルキシズム批判」
6.29 矢吹慶輝「反宗教運動について」
9.15 宇野円空「マルキシズムの宗教史観批判」
10.27 姉崎正治「仏教の社会観と社会案」
11.24 故渋沢子爵追憶座談会
1933（昭和 8）年
4.26 今岡信一良「キリスト教伝道の転向—米国伝道調査団の報告について」

4. 解散に向けて

この後, 昭和史は太平洋戦争に向かって傾斜していくのだが, 帰一協会の解散に至るまでの状況は今のところ不明のままである。東京大学総合図書館の「図書備付証」によれば,1930 年に, 帰一協会所蔵の洋雑誌が姉崎によって寄贈されている(64) 。これは, 少なくとも, 姉崎が協会所蔵雑誌を処分できる立場にあったことを示している。さらに進んで, 姉崎が活動の中心から退いていく兆候であると言えるかも知れないが, それは推測の域を出ない。姉崎は, 成瀬仁蔵を「いわば目はないが足がきく盲」, 自分を「目はあるが足はきかぬという人間」であると評したが(65) , 成瀬の脚力を 1919 年に失い, そして帰一協会の財政的支えだった渋沢栄一を 1931 年に失っては, 運動

を先へと進める力が失われたとしても不思議ではない。姉崎は58歳になっており，その後，1932年までに切支丹五部作の刊行を終え，1934年には東大を退職している。1930年代は毎年数ヶ月を海外で過ごす生活が続き，1939年には貴族院議員となる。この時期に帰一協会がどのような形で存続していたのかは不明である。1936年発行の『岩波教育辞典』第一巻，「帰一協会」の項を矢吹慶輝が執筆しており，そこには，毎月一回例会が開かれ，会員数は百十四名と記されている。これが実情を正確に反映した記述であるかどうかは定かではない。しかし例会のラインアップから見て取れることは，結成当初，必ずしも会員相互に完全なるコンセンサスがなかったとはいえ概ね維持されていた，諸宗教の協調という関心が，昭和初期には背後に退いているということである。もとより，帰一協会は宗教のみに関わる組織ではなく，上述の「研究問題要目案」にある通り，政治問題も射程に収めていたという指摘はできる。しかし三十年間の会の歩みの折り返し地点において，日本の指導者層に位置した会員達にとって，宗教がもはや第一の関心たり得ない時代の趨勢が読み取れるのである。解散前の最後の十年間については，現時点では確かなことは言えず，新たな資料の発見を待って考察を進めることを今後の課題としなければならない。最後に，1942年12月21日，姉崎正治が熱海伊豆山温泉の常宿相模屋から小口偉一に宛てて会員への解散通知を命じた書簡を引用して結びに代えることとする。

きのふは御苦労。会計報告は何れ一月になるべく，依て其に先って別紙通知を出されたし（昨日出席の人々へも），も一つは竹園君への退職手当，きのふの公債に五十円を加へて送られたく，書類手続は，廿四日帰京後作る，その前にでも送られたし，而してそれと共に君可ら一寸手紙を出されたし。私は廿三日夕に帰る可廿四日全日用事。

十二月廿一日　伊豆山にて　正治　小口君

添付別紙

拝啓歳末寒気加はり候　折柄御健勝奉賀候。先日御通知申上候通り，本会終結解散の事，去廿日総会にて議決確定仕り，本会は此によりて三十年の歴史を閉づる事と相成候。茲に改めて会員各位の長年に亙る御協力に対して感謝の意を表し候。尚本会成立以来の経過につきては，総会の節にも略述致候が，近日中に草稿を整へ，本会終結の辞として，会計事務報告と共に（又は其と少々後れて）高覧に供すべく候。其他，総会午餐の席上会員の発議により，来年春期五月頃に帰一協会記念旧友会とも申すべき会合を（成るべくは王子の旧渋沢邸園にて）開く事と致し，時日等決定の上は御通知可申上間，御参会の程，今より希ひ上げ候。時下御大切に御越年可被遊，御清福を祝し奉候　再拝　帰一協会幹事代表　姉崎正治

註

(1) 本稿は，「姉崎正治と帰一協会—結成の理念と昭和期の活動をめぐって」『日本女子大学総合研究所ニュース』10，2001年，として発表したものを基礎に，その後，手に入った諸資料をもとに大幅に改稿・再構成したものである。

(2) 東京大学宗教学研究室所蔵，姉崎正治関係資料 (16–0–1–136)，姉崎正治発小口偉一宛書簡による。姉崎正治『新版　わが生涯』姉崎正治先生生誕百年記念会，1974年，151頁注では，12月2日となっているが，誤りであろう。この注のもとになった「帰一協会記事（六）大正一三年起」は現

在所在が不明である。

(3) 中嶌邦「帰一協会小考（1）・（2）」『日本女子大学紀要文学部』36–37，1987–88 年。

(4) 帰一協会を知るための主な資料としては，同協会発行の『帰一協会会報』1–13（1912–24 年），『帰一協会叢書』全 10 巻（1916–25 年）に加えて，渋沢青淵記念財団竜門社編纂『渋沢栄一伝記資料』第 46 巻第七款「帰一協会」が詳しい（記事は渋沢没年の 1931 年前後まで）。昭和期の活動について本稿では主として次のものを利用した。東京大学宗教学研究室所蔵『宗教学研究室日誌』，同所蔵『帰一協会事務日誌』，渋沢史料館所蔵『帰一協会書類』（書架番号 133，配列番号 18–19『旧渋沢事務所要用書類綴込目録』）。なお，筆者が未見の資料は『帰一協会会報』の第 10 号，第 11 号である。これらの所在等をご教示いただければ幸いである。

(5) 宗教間の協力という流れでは，1893 年シカゴにおける万国宗教大会開催，それに呼応して釈宗演・戸川残花等によって開かれた 1896 年の宗教家懇談会などが背景にあるが，三教会同はむしろ，各教団と国家との協力が焦点となりがちであった。藤井健志「戦前の日本における宗教教団の協力」中央学術研究所編『宗教間の協調と葛藤』佼成出版社，1989 年，270 頁。以下も参照。鈴木範久「近代日本宗教協力小史」，竹内整一・月本昭男編『宗教と寛容』大明堂，一九九三年。山口輝臣「明治末年の宗教と教育——三教会同をめぐって——」『東京大学史紀要』14，1996 年。

(6) これは帰一協会が三教会同とは直接のつながりを持たないことの証左であるが，一方で，床次竹二郎は帰一協会の発足時に会員となっている。

(7) 渋沢栄一，姉崎正治の回顧による。『渋沢栄一伝記資料』46，412–414 頁。

(8) 影山礼子「成瀬仁蔵」『岩波キリスト教辞典』2002 年。また影山は，成瀬の思想的変遷を「伝統思想→キリスト教→「帰一」へ」と要約している。影山『成瀬仁蔵の教育思想』風間書房，1994 年，131 頁。

(9) 仁科節編『成瀬先生伝』櫻楓会出版部，1938 年（初版 1928 年）157 頁。

(10) 前掲『成瀬先生伝』353 頁。

(11) 中嶌邦『成瀬仁蔵』吉川弘文館，2002 年，115–116 頁，151–152 頁。

(12) 正式発足前に成瀬，渋沢らが用いた言葉。『渋沢栄一伝記資料』46，406 頁，425 頁。

(13) 前掲『成瀬先生伝』379 頁.

(14) 成瀬の蔵書には，エマーソン，ブラバツキー，ベサントらの著書とともに，宗教心理学関係書も多く含まれる。『成瀬文庫目録』日本女子大学図書館，1979 年。

(15) 前掲『成瀬先生伝』381 頁。

(16) 前掲『成瀬先生伝』381 頁。

(17) 中嶌前掲「帰一協会小考 (2)」注 (55) より。おそらくこうしたイメージのためであろう，『広辞苑』（5 版）の「ユニテリアン」の項には，「わが国には一八八七年 (明治二〇) に渡来し，のちユニテリアン協会または帰一協会と称した」という記述がある。これは誤りであり，単なる誤植かもしれないが，実際には，帰一協会に加わっていた今岡信一良が戦後に結成した「東京帰一教会」が，ユニテリアンの残党を集めたものであった。今岡「東京帰一教会の趣旨」『人生百年』日本宗教自由連盟，1981 年。

(18) 『渋沢栄一伝記資料』46，434 頁。社会・経済・政治問題には「(精神的方面より観たる)」と但し書きがある。

(19) 『成瀬先生伝』307 頁。麻生正蔵「同社教育から日本女子大学教育へ　上・下」『丁酉倫理会講演集』415–416 頁，1937 年。

(20) 試みに，比較的知られている名前を目に付くまま列挙してみる。Felix Adler(1851–1933), Henri Bergson(1859–1941), John Dewy (1859–1952) , Rudolf Eucken(1846–1926), Charles W. Eliot(1834–1926) , Ernst Haeckel (1834–1919), G. Stanley Hall (1844–1924), Adolf

Harnack(1851–1930), Nathan Soederblom (1866–1931), Sidney Webb(1859–1947), James Woods(1864–1935), Wilhelm Wundt (1832–1920). *First Report of the Association Concordia*, 1913, pp. 7–64.

(21) 『渋沢栄一伝記資料』46，416 頁。但し，成瀬の存命中の日米の交流継続については中嶌邦 (1988) を参照。

(22) 成瀬仁蔵宛書簡。中嶌 (1988) より引用。

(23) 『渋沢栄一伝記資料』46，414 頁，724 頁。自助団とその周辺については中嶌 (1988) に詳しい。成瀬による自助団結成の趣意書も紹介されている。

(24) 『渋沢栄一伝記資料』46，407–408 頁，419–423 頁。

(25) 1915 年 2 月 10 日，シカゴ大学神学部長マシューズ博士歓迎会のエピソード。『時と人と学と』東京大学宗教学研究室，1980 年，37 頁。歓迎会については『帰一協会報』特別号，1915 年。なお渡米中の姉崎は欠席。

(26) 渋沢，姉崎による回顧。『渋沢栄一伝記資料』46，413 頁，415 頁。

(27) 井上については，以下を参照。平井法「井上哲次郎」『近代文学研究叢書 54』昭和女子大学近代文学研究所，1983 年。

(28) 井上「宗教の将来」『新仏教』3–10，1902 年，等を参照。

(29) 逆に，井上は三位一体などという「荒唐無稽の説」を拒絶するとして，ユニテリアンにはやや好意的である。「余が宗教論に関する批評を読む」『哲学雑誌』179，1902 年。

(30) アメリカンボードの宣教師，S・ギューリック，D・C・グリーンをはじめ，浮田和民，新渡戸稲造，海老名弾正，高木壬太郎など。

(31) 井上「将来の宗教に関する意見」『哲学雑誌』154，1899 年。

(32) 井上「各宗教の根柢に於ける契合点」『東洋哲学』7–1，1900 年。

(33) 井上「時局上より見し宗教」『新仏教』5–7，1904 年。

(34) 井上においては，この一致とは国体，日本精神との一致ということでもあろう。また，1941 年の回顧では，帰一協会について「いろいろな人がいろいろな意見をかはるがはるに述べるのみで，宗教は寧ろ不帰一の傾向になってきたので，宗教的信念より云へば，予期した所よりむしろ横にそれて行った感がある。」としている。『渋沢栄一伝記資料』46，416 頁。

(35) 井上「筆禍事件の真相」『日本精神の本質』大倉広文堂，1934 年，比佐祐次郎「井上博士と三種の神器問題」『丁酉倫理講演集』294，1927 年，同「三種神器問題上奏者草生少将の反省を促す」『東亜の光』22–5，1927 年。井上「筆禍事件雑感」『東亜の光』22–6，1927 年。

(36) 姉崎「宗教家懇談会所見」『太陽』2–21，1896 年。姉崎関係の年代については，磯前順一・深澤英隆・高橋原「姉崎正治年譜」，磯前・深澤編『近代日本における知識人と宗教—姉崎正治の軌跡』東京堂出版，2002 年。

(37) 比屋根安定『日本宗教史』三共出版社，1925 年，1056 頁。藤井前掲論文「戦前の日本における宗教教団の協力」も参照。

(38) 姉崎「帰一の大勢」『六合雑誌』32–8，1912 年。

(39) 姉崎「宗教家懇談会所見」『教育と宗教』博文館，1912 年に再録，584 頁。

(40) 姉崎の国体論はこの例外であるかに見え，「日本の為には仏教もキリスト教も皆，勅教の脚注解釈たるべきである」とされ，諸宗教の上に教育勅語が置かれている（前掲『教育と宗教』二九六頁）。しかし，これは「日本の為には」という限定つきであり，その根底には普遍的な信仰の源泉たる真理が想定されている。なお，こうした国体論は大正期には「人本主義」の主張へと変化してゆく。次を参照。高橋原「解説」，島薗進編『シリーズ日本の宗教学第一集姉崎正治集』第九巻所収，クレス出版，2002 年。

(41) 前掲『渋沢栄一伝記資料』46，600 頁以下。
(42) 姉崎は渡米中を除いて，『会報』の編輯兼発行者としてクレジットされている。
(43) 前掲『渋沢栄一伝記資料』46，416 頁。
(44) 前掲『渋沢栄一伝記資料』46，587 頁以下。
(45) 「宣言」，姉崎正治「宣言発表につきて開会の辞」『帰一協会会報』7，1916 年 3 月。
(46) 『わが生涯』117 頁。寺崎暹『比屋根安定——草分け時代の宗教史家』リブロポート，一九九五年，44 頁，53 頁。その決議は以下。「被教育者ノ心裡ニ自然ニ発言スル宗教心ノ萌芽ハ教育者ニ於テ之ヲ無視シ若クハ蔑視シ因テ信念ノ発達ヲ阻碍スルコト無カランコトヲ要ス。」『帰一協会会報』6，1915 年。
(47) 内容については，『帰一協会会報』6，1915 年 11 月，前掲『渋沢栄一伝記資料』46，500–576 頁。
(48) 8 号の発行が 1916 年，9 号が 1920 年，最後の 13 号は 1924 年 1 月，発行順序が前後して 12 号が 1924 年 9 月となっている。
(49) 博文館から公刊され，C. A. Ellwood の翻訳四冊を含むなど，内容は帰一協会の通常の活動とは区別される。Ellwood と姉崎の間に交わされた書簡は東京大学宗教学研究室に所蔵されている。前掲『近代日本における知識人と宗教』所収，「姉崎正治関係資料目録」(70)–(72) 頁。
(50) 1914 年 5 月，1915 年 1 月，5 月。非売品。内容は概して，欧米の戦時評論の翻訳紹介である。
(51) 『渋沢栄一伝記資料』46，633–634 頁，641 頁に例会の日時，場所のみが掲載されている。
(52) 結成から，成瀬死去までの活動状況は前掲中嶌論文を参照。
(53) 姉崎『わが生涯』姉崎正治先生生誕百年記念会，1974 年，120–126 頁。手戸聖伸「姉崎正治による東大図書館復興とその背景」『東京大学宗教学年報（別冊）』18，2000 年。
(54) 『渋沢栄一伝記資料』46，713 頁。
(55) 『渋沢栄一伝記資料』46，413 頁。
(56) 1912 年 7 月の第一例会開催時には会員数 40 名，1913 年 2 月の，会報第 1 号掲載の会員名簿では 63 名。
(57) まとまった記録が残されているのは大正 13 年から昭和 2 年 (1924–1927) である。
(58) 見つかったものは大正 13 年度から昭和 5 年度（1924–1930）に至るもののみである。
(59) この額は 1912 年 11 月の第三例会で決められた通りである。『渋沢栄一伝記資料』46，436 頁。
(60) 佐木秋夫『宗教学説』三笠書房，1937 年，62 頁。
(61) 1938 年の談話。『渋沢栄一伝記資料』46，416 頁。「分家」とは，日本宗教懇話会以外にも，いずれも姉崎自身が関わった，国際連盟協会 (1920 年)，日本太平洋問題調査会 (1925 年)，国際文化振興会 (1934 年) などのことであろう。
(62) 『中外商業新報』15200，1928 年 6 月 9 日，『渋沢栄一伝記資料』46，697–698 頁に再録。
(63) 今岡信一良は，実名を伏せてはいるが，国士舘創設者柴田徳次郎が，新渡戸稲造に「あなた日本人ですか，アメリカ人ですか」と「無礼極まる質問」を放ち，また宮内大臣の君が代斉唱について司会者にくってかかり，「大会を打毀しにかかった」としている。今岡前掲『人生百年』409 頁。鈴木前掲「近代日本宗教協力小史」も参照。
(64) 4 月 16 日，22 日，11 月 5 日の三回。誌名は以下。*The Atlantic Monthly, Deutsche Rundschau, The Nation, The Nineteenth Century and After, Revue des Deux Mondes, Sitzungsberichte der Konigl, The Fortnightly Review, Scientifia, The Review of Reviwes.* 鈴木健郎・高橋原「姉崎正治蔵書目録（東京大学所蔵分）」『東京大学史紀要』17，1999 年。
(65) 姉崎『わが生涯』116 頁，姉崎「青淵翁と宗教問題」『竜門雑誌』542，1933 年。

The Ideal and Consequences of *Kiitsu Kyōkai*: On its Activity in the Shōwa Era

Hara TAKAHASHI

The *Kiitsu Kyōkai* (The Association Concordia) was an organization founded in the last year of Meiji (1911) for the purpose of achieving "concord and cooperation between classes, nations, races, and religions." However, as I demonstrate in this paper, each of the founding members of the society interpreted the concept of "concord" differently. The participating members had varying, even opposing and contradictory visions of the founding principle of their movement. I discuss the activities of the following founders: Jinzō Naruse, Eiichi Shibusawa, Tetsjirō Inoue and Masaharu Anesaki. I then attempt to illuminate the activities of the Kiitsu Kyōkai in the Shōwa Era, through an examination of an account of the minutes of the association's monthly meetings from 1924 to 1933. Using previously unexamined materials I demonstrate that the Kiitsu Kyōkai in its later period was primarily led by Masaharu Anesaki and his staff, and focused on social and political problems rather than religious and ethical ones. It can therefore be concluded that this association was founded in the cooperative social climate of later Meiji but ultimately dissolved in the tense atmosphere of the wartime era, finally disbanding in 1942, failing to realize its original ideal of concord.